## ブリューゲルの絵が動く！
## 聖書と16世紀、現代つなぐ映画

ピーテル・ブリューゲルの大作「十字架を担うキリスト」が映画になった。題して「ブリューゲルの動く絵」。なるほど、監督自身が描いたという背景画や実写ロケ、CGなどを合成した映像は美しく、まさに「十字架を担うキリスト」画中の人物たちが動きだしたかのような趣き。

だが、物語はいささかこみいっている。そもそも原作画自体が、画家が生きた時代のフランドル風景・風俗の中に、処刑地ゴルゴダの丘に向うキリストや聖母マリアを描きこんだ象徴的な作風だから。

映画は、フランドル地方の朝で幕を開ける。岩山の高みに鎮座する風車がゆっくりと動きだし、スケッチブックを手にしたブリューゲル（ルドガー・ハウアー）は村へ出かけ、朝露にぬれた蜘蛛の巣に画趣を覚える。のどかな農村風景はしかし、馬にまたがった兵士たちの登場で一変。彼らは罪のない若者をなぶり殺し、車輪に仰向けに括りつけ見世物のようにポールの上に掲げる。男の妻は泣き崩れるが、周囲は見て見ぬ振り。

そんな支配者たちの暴虐を画家の友人（マイケル・ヨーク）は憂い、そして問う「このありさまを表現できるか？」。問いに応えるように画家が風車小屋に合図を送ると、風車はゆっくりと動きを止め、彼らの目前の風景も静止。聖書の物語が展開してゆく…　というストーリー。

ポーランド人監督レフ・マイェフスキ（1953～）は、ビデオ・アーティストとして知られ、ジュリアン・シュナーベル監督「バスキア」（1995）の脚本を担当したことも。16世紀の絵画と最新映像のあわいに現代にも通じるテーマを…といってしまえばそれまでだが、何とも画面の美しさが気になる。

映画「ブリューゲルの動く絵」より
© 2010, Angelus Silesius, TVP S.A

風車の巨大歯車の動き、じゃれ合い跳ね回る子供たち、丘上の磔刑シーン、嘆きの聖母たち、そして何より靄の中から徐々に姿を現す赤い服の兵士たち。彼らが掲げた被害者が鳥たちに啄まれる残虐シーンさえ夢幻的な美しさに包まれる。右から左へ、またその逆に、以降も鳥たちは頻繁に遠く画面上部を横切るのだが、間違いなくCGであろう彼らはあの人間の眼窩を啄んだ鳥たちでもある

カラー96分。12月17日（土）より渋谷・ユーロスペースにて公開、他全国順次。

ピーテル・ブリューゲル「十字架を担うキリスト」
124×170×cm　1564年　ウィーン美術史美術館蔵
© Kunsthistorisches Museum Vienna

## 美大生と社会とを繋ぐ展覧会
## 「THE SIX」今年も開催

美術といえば、一般的には「わからない」「むずかしい」「関係ない」と思われることも多い。それ